



一面に広がるシヤガ(初夏)



遊泉寺銅山 製錬所など遠景(明治41<1908>年)



梅林苑

桜が満開の遊泉寺銅山跡記念公園

◀▲かつて銅の採掘で栄えた遊泉寺銅山は、閉山後の植林によって美しい緑がよみがえりました。季節ごとに桜、梅、シヤガ、つばきなど様々な花が咲き誇り、銅山跡を彩ります。



5/10

1940-2020 小松市制 80周年

特集 遊泉寺銅山跡 里山みらい館オープン

「ものづくりのまち」として発展を続けている小松市。この地の鉄工機械工業の原点だったとも言える遊泉寺銅山は、閉山からちょうど100年という節目を迎えます。今回は、遊泉寺銅山跡再生に向けた取り組みや、新しく開館する銅山の学びの施設「里山みらい館」を紹介します。

特集に関する問い合わせ 観光文化課 ☎24・8076



▶銅山跡に残る巨大煙突などの遺構や遊歩道の整備が進んでいます。

が、高い技術力と多様な産業が集積する小松の礎を築いたのです。
遊泉寺銅山跡活用プロジェクト始動
現在の遊泉寺銅山跡には、高さ20メートルもある巨大煙突や堅坑跡など、貴重な遺構がいくつも残されています。これらの遺構を守り、銅山跡を日本遺産に認定された小松の「石の文化」を構成する文化財として後世につなぐため、地元3町内会や商工会議所などが中心となり「遊泉寺銅山跡活用プロジェクト」を進めています。プロジェクトでは、多くの企業から寄付をいただき、銅山跡を「遊泉寺銅山ものがたりパーク」と銘打ち、ものづくりの歴史や里山の自然などを「歩いて・見て・感じられる」観光スポットとして整備しています。



▲館内には、明治から大正にかけての遊泉寺銅山の貴重な写真が並びます。

往時の銅山遺構や歴史を学べる施設が誕生
「遊泉寺銅山ものがたりパーク」の入口に位置し、プロジェクトの一環として5月10日(日)にオープンを迎えるのが「里山みらい館」です。
施設内では往時の写真や解説パネルなど、歴史を深掘りする様々な展示が楽しめます。また、会議スペースや休憩所などもあり、幅広い用途で使用できます。
遺構を守り残しながら、小松のものづくりの歴史や精神、文化を学ぶことのできる魅力あるスポットとして生まれ変わりつつある遊泉寺銅山跡から、今後も目が離せません。

ものづくりのまちこまつの原点「遊泉寺銅山」
鶴川町の里山に位置し、江戸時代には採掘が始まっていた遊泉寺銅山。明治35(1902)年には土佐(高知県)出身の実業家・竹内綱が譲り受け、その長男で、後に小松製作所(現コマツ)を起す竹内明太郎が本格的な経営に乗り出しました。
銅山用電力を賄うための神子清水発電所を建設したほか、画期的な欧米の最新技術の導入などにより銅の生産量は高まり、大正初期には千人近くが働く銅山としてにぎわいました。北陸線小松駅とつながる専用鉄道の開通もあって、遊泉寺は巨大な鉱山町として成長を遂げ、たくさんの商店が軒を並べたとされています。そんな中、明太郎は機械工業の重要性にも着目し、大正6(1917)年には鉱山用機械の製作などを目的とした小松鉄工所を設立しました。
ところが、小松鉄工所設立の3年後には、第一次世界大戦後の不況で遊泉寺銅山は経営危機に直面し、閉山となります。一方、小松鉄工所はその翌年の大正10(1921)年に、銅山経営から分離独立して小松製作所となり、現在の世界的建機メーカー「コマツ」へと発展しました。
まさに、遊泉寺銅山にまつわる歴史

INTERVIEW
貴重な遺産を後世に伝える
今回、遊泉寺銅山跡活用プロジェクト推進の中で、「ものづくりのまちこまつ」の原点である銅山の貴重な遺産を後世に伝える拠点施設の整備が進み、「里山みらい館」がオープンしたことは、地元としても大変うれしい限りです。
この地には、遊泉寺銅山跡以外にも、ハニベ巖窟院、う川古代桜、小松の石の文化の名所旧跡が数多く点在しています。それらを有機的に結び付けて、この地域一帯が盛り上がるよう、これからも活動を展開してまいります。



遊泉寺銅山跡 里山みらい館運営委員会 代表 石山孝一さん

ご利用の際は、☎47・3188(ハニベ巖窟院)までご連絡ください(ハニベ巖窟院を経由して里山みらい館につながります)。

